PAL 35－50 P 形

可変直流定電圧・定電流電源

取扱説明書

菊水電子工業株式会社

ー 保証 ー

この製品は、菊水電子工業株式会社の厳密な試験・検査を経て、その性能が規格を満足していることが確認され、お届けされております。

弊社製品は、お買上げ日より１年間に発生した故障については、無償で修理いたします。
但し、次の場合には有償で修理させていただきます。

1．取扱説明書に対して誤ったご使用および使用上の不注意による故障・損傷。
2．不適当な改造・調整・修理による故障および損傷。
3．天災・火災・その他外部要因による故障および損傷。

なお、この保証は日本国内に限り有効です。

ー お願い ー

修理・点検・調整を依頼される前に、取扱説明書をもう一度お読みになった上で再度点検していただき、なお不明な点や異常がありましたら、お買上げもとまたは当社営業所にお問い合せください。

目　　次

1 章　概　要

1-1　概　説

○　PALシリーズはスイッチング・レギュレータの軽量化技術とシリーズ・レギュレータ(直列制御方式)の高品質技術を結合させた軽量で高性能な直流安定化電源です。
本シリーズは大きく重い商用トランスやチョーク・コイルを使用した従来の電源に比べてほぼ1/2(当社比)の重量，スイッチング方式を採用しているにもかかわらず出力は低リップルでしかも低出力インピーダンス，低温度係数と高性能であらゆる用途に使用できるユニバーサル電源です。

○　PALシリーズの機能

1. アウト・プットスイッチ：チャタリングやノイズの発生なしにパネル面から出力のON/OFFが可能。(電子的スイッチ)
2. プリセット・OVP(過電圧保護装置)：保護機能を中止することなくOVPの設定電圧を電圧計で表示できるためトリップ電圧の設定及び確認が容易にできます。万一，出力が設定電圧を越えると瞬時に電源スイッチ遮断，発振停止，トランジスタ遮断で負荷を保護します。
3. カレント/ボルテージ・リミットスイッチ：定電圧(C.V)と定電流(C.C)のクロスオーバ・ポイントをメータで表示します。
(電圧計は定電圧の設定値を，電流計は定電流の設定値をそれぞれ指示します。)出力OFF時にプリセットスイッチとして使用できます。

○　PALシリーズの保護装置は前述のプリセットOVPのほか過熱保護回路，電流検出回路，内部電圧検出回路，温度ヒューズ，入力ヒューズ，突入電流防止回路を備えています。

○　負荷の許容電圧範囲が狭く誤操作等によるわずかな過電圧でも損傷する恐れのある場合(半導体)のため，電圧設定可能な高速形のOVP(サイリスタ・クローバ方式)を内蔵しています。(前面パネルのクローバ・スイッチで選択できます。)

○　本機の外形は卓上タイプとなっていますが専用ブラケットにてEIA規格又はJIS規格ラックに取付可能です。

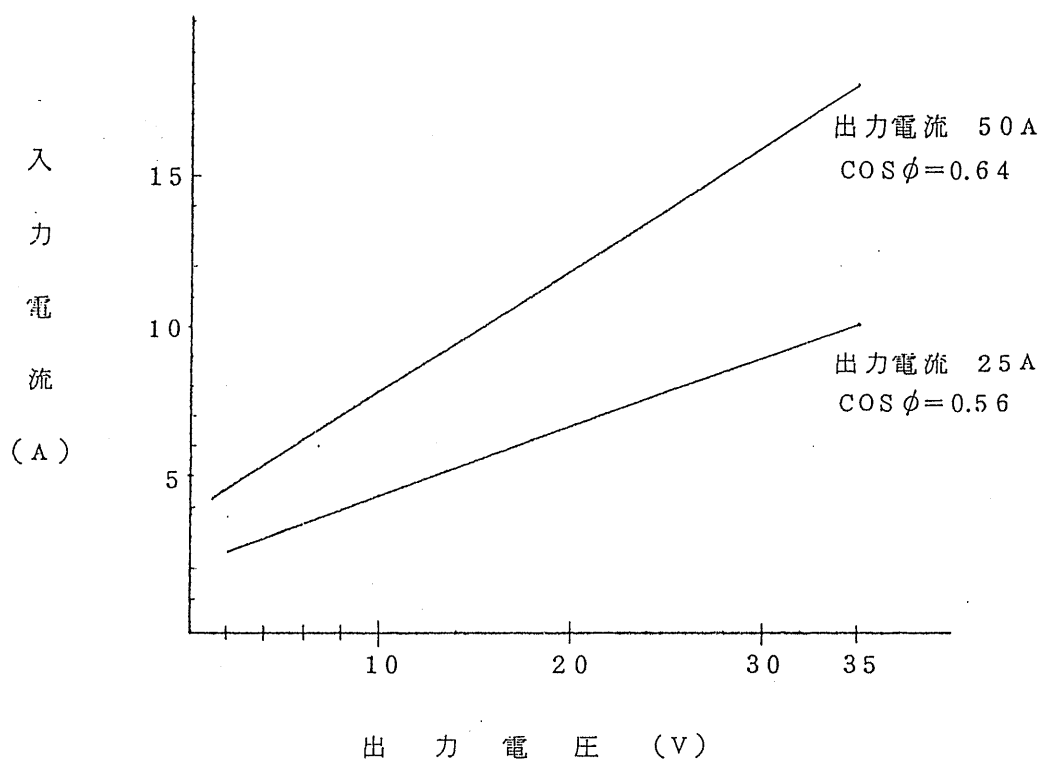
○　ご使用に際しては本取扱説明書を熟読の上ご使用ください。不明の点お気付きの点がございましたら代理店，営業所，本社までご連絡ください。

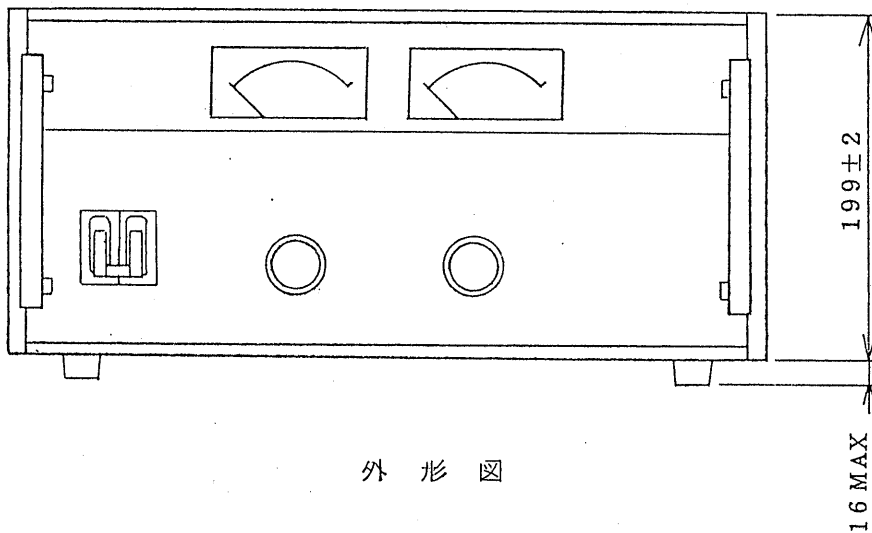
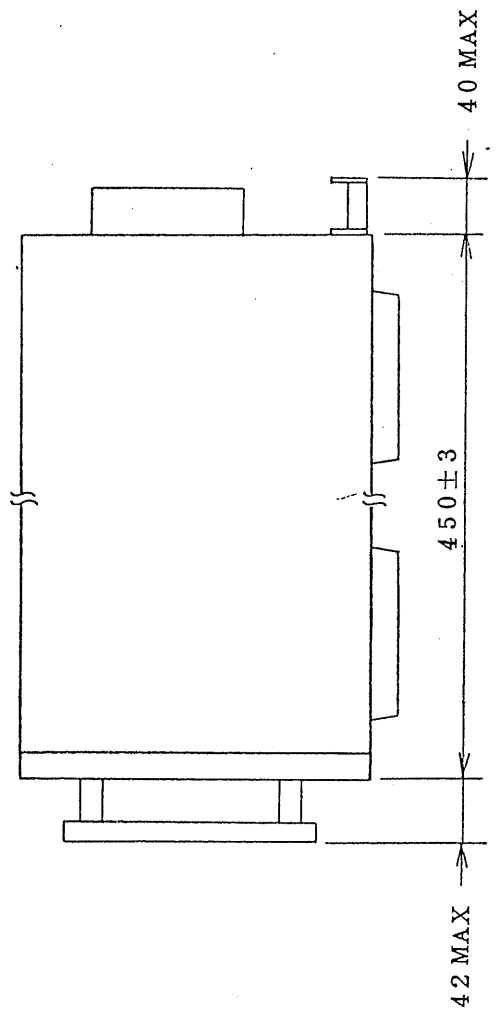
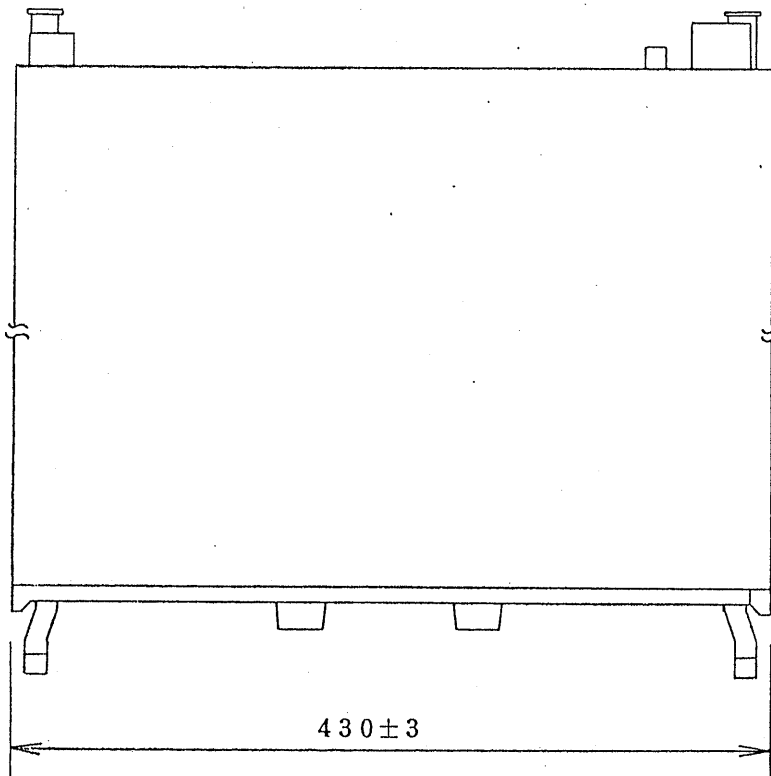
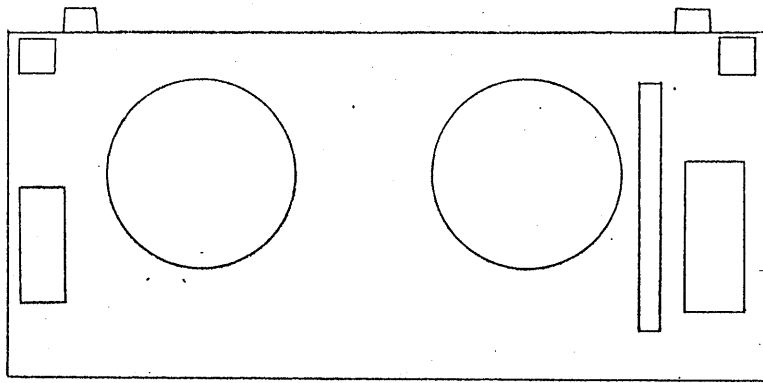
1－2　仕　　様

形　名				PAL35－50P
入　力				
入力電源	AC200V±10% 50/60Hz 1φ			
消費電力　定格負荷				約3.7 kVA
出　力				
出力電圧　10回転				0～35V
電圧分解能（理論値）				6mV
出力電流　1回転				0～50A
電流分解能（理論値）				125mA
定電圧特性				
安定度＊1　電源電圧の±10%変動に対して				1mV
安定度＊1　出力電流の0～100%変動に対して				2mV
リップル・ノイズ＊2〔rms〕（5Hz～1MHz） 〔P－P〕（DC～10MHz）				1mVrms 20mVp-p（TYP）
過渡応答特性＊3（5～100%）　標準値				50μSec
温度係数　標準値				50ppm/℃
リモート・コントロール　電圧／出力電圧比				約10V/35V
リモート・コントロール　抵抗／出力電圧比				約10kΩ/35V
リモート・コントロール　電流／出力電圧比				約1mA/35V
定電流特性				
安定度　電源電圧の±10%変動に対して				6mA
安定度　出力電圧の0～100%変動に対して				10mA
リップル・ノイズ＊2〔rms〕（5Hz～1MHz）				20mArms
リモート・コントロール　電圧／出力電流比				約10V/50A
リモート・コントロール　抵抗／出力電流比				約1kΩ/50A
リモート・コントロール　電流／出力電流比				約0.5mA/50A
使用周囲温度範囲	0～40℃			
使用周囲湿度範囲	10%～90%RH			
冷却方式	ファンによる強制空冷			
出力極性	正または負接地可能			
対接地電圧	±250V DC			

仕　　様（つづき）

					PAL35−50P
保　護　装　置					
過電圧保護（OVP）	電圧設定範囲＊4				3〜38V
	動作パルス幅＊4				200μSec
	動　　作	発振停止，直列制御トランジスタ遮断 電源スイッチの遮断			
過熱保護	検出温度				85℃
	動　　作	発振停止，直列制御トランジスタ遮断 電源スイッチの遮断			
入力ヒューズ定格					
	AC200V				30A
温度ヒューズ定格					135℃
指示計：フルスケール					
直流電圧計	JIS2.5級				35V
直流電流計	JIS2.5級				55A
定電圧動作表示		C. V　緑色LEDにて表示			
定電流動作表示		C. C　赤色LEDにて表示			
絶　縁　抵　抗＊5					
シャッシー入力電源間		DC　500V　30MΩ以上			
シャッシー出力端子間		DC　500V　20MΩ以上			
外　形　寸　法		430（440）W×199（215）H×450（535）D㎜			
ラック取付	JIS規格（ミリラック）	BH4AM			
	EIA規格（インチラック）	BH5A			
重　　量					約28kg
附　属　品（梱包品）					
取扱説明書		1　部			
入力ヒューズ（AC200V仕様30A）		1　本			
ガードキャップ，電圧チェックチップ，DINコネクタ		1　式，2　本，1　本			
入力電源コード		アース線付 3芯キャブタイヤケーブル約3m			

注）　＊1　センシング端子を使用して測定
　　　＊2　正又は負出力のいずれかを接地して測定
　　　＊3　出力電圧の0.05％＋10mV以内に復帰する時間
　　　＊4　標　準　値
　　　＊5　周囲相対湿度70％以下にて

85.6.28

84437471

外　形　図

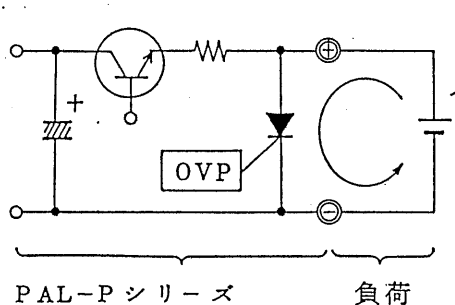
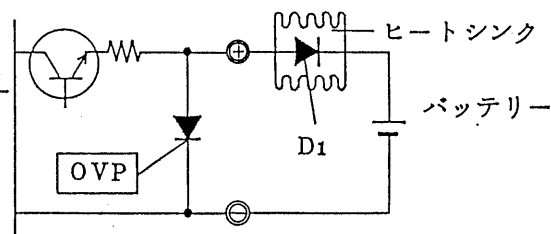
2章　使　用　法

2－1　使用前の注意事項

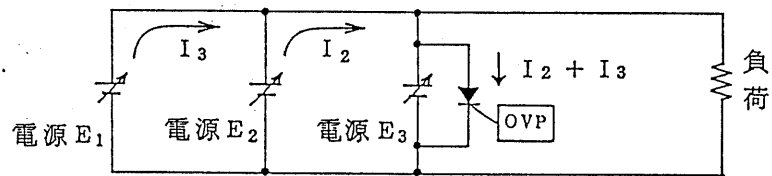
1. クローバ・スイッチについて

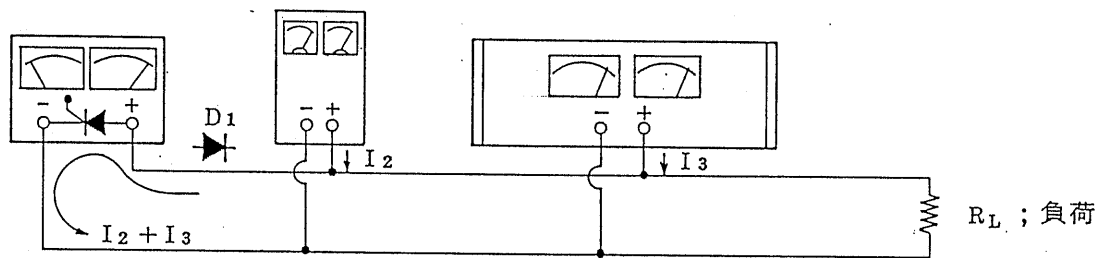
PAL35－50Pはパネル面のクローバ・スイッチで2種類の過電圧保護動作が選択できます。

クローバ・スイッチをOFFにすると一般のPALシリーズと同様に過電圧で入力スイッチを遮断する保護動作をとりますがクローバ・スイッチをONにすると過電圧の検出で出力端子間に接続されたサイリスタを導通させて出力に出現した過電圧をひき下げます。この動作は半導体等の過電圧耐量の少ない負荷には有効な保護動作ですが負荷がバッテリーや大容量のコンデンサーの場合〔図2－1〕に示すように負荷の両端を短絡することになり大変に危険ですので，スイッチOFFの状態で使用してください。

スイッチONで使用する場合は〔図2－2〕の様に直列にダイオードを挿入して下さい。（ダイオードは出力定格以上のものでヒートシンクが必要です。）

〔図2－1〕
直接バッテリーを接続すると
OVPが動作した場合，危険である。

〔図2－2〕
対策として直列にダイオードD1
を挿入する。

2. 並列接続について

クローバ・スイッチOFFでは定格電圧以下ならば他の電源との並列接続になにも制約はありませんがスイッチONの場合は，〔図2－4〕の様にプラス出力に直列にダイオードを入れて並列に接続してください。この理由は〔図2－3〕に示すように出力が並列に接続されている為保護動作したサイリスタにすべての出力電流が集中して流れつづけサイリスタを焼損する恐れがあるからです。
（ダイオードは定格出力以上のもので，ヒートシンクが必要です。）

〔図2－3〕 クローバ・スイッチをONにしておくと万一OVPが動作した時すべての電源の出力電流がサイリスタに集中し流れつづけるのでサイリスタを焼損する恐れがある。

PAL－Pシリーズ

〔図2－4〕 電源の並列接続時の注意

クローバ・スイッチがONの時，万一，OVPが動作すると他の電源の出力電流がOVPサイリスタに流れ続け焼損する恐れがあるので出力に直列にダイオードD_1を挿入して下さい。

3. 入力電源について

○単相200V±10％（180V～220V）
　48～62Hzの範囲でご使用ください。
○入力ヒューズはAC200V　30Aです。
○消費電流はグラフを参照してください。

4. 突入電流について

○電源投入時の突入電流はピーク値で次の通りです。

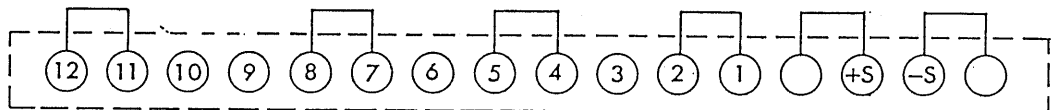
AC200V時　約110A　peak以下，半値幅　　3ms

5. 電源コードについて

○本機に付属している電源コードは接地線付3芯キャブタイヤケーブル（5.5 SQ）です。付属以外のケーブルを使用する場には必ず3芯ケーブル（5.5 SQ以上）をご使用下さい。

≪警　告≫　感電事故防止のため，電源コードの接地線は必ず接地して下さい。

6. 出力について

○後面端子台の各ジャンパーは下図のようにしまっていることを確認して下さい。（標準状態にて）

〔図2－5〕

○通常は出力端子のいずれか一方を，ショートバーでGNDに接続して使用して下さい。

7. 周囲温度について

○本機の仕様を満足する温度範囲は０～４０℃です。この範囲内でご使用ください。

○周囲温度の高い所で使用すると内部の温度検出回路が動作し電源スイッチを遮断します。その場合は機器を冷してからスイッチを再投入してください。（一般に半導体の寿命，電解コンデンサーの寿命やトランスに使用される絶縁体の寿命と周囲温度との間には指数函数的な関係が成立し，周囲温度の上昇に対して部品の劣化は急速に進行する事が予想されます。従って周囲温度をひくくおさえることは機器の寿命，信頼性の点からも大切なことです。）

○特に－１０℃ 以下の低温環境では回路が不安定になることが考えられますので使用しないでください。

8. 設置について

○メッキ工場や電解化成の現場からは電源装置をなるべく離してリモートコントロールを利用した出力制御を行ってください。

○通気口（上面，側面，底面），ファン吹出口をふさがないようにしてください。

○ファン吹出口は３０ cm 以上あけてください。

○湿度の高い場所，ほこりの多い場所での使用は信頼性の低下をまねき故障の原因となりますので注意してください。

○振動のなるべく少ない所に設置してください。

○金属腐食性ふん囲気や硫酸ミストの多い環境での使用は避けてください。

9. 配線材について

○負荷への配線材は下記の電線電流容量表に従ったものを使用してください。細い電線は電圧降下のため負荷端で電圧の変動になるほか電線が発熱して危険です。

〔表２－１〕

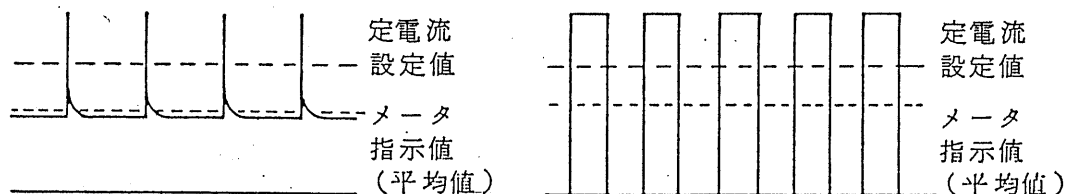
Ta ＝３０℃

公称断面積	当社推奨電流	電気設備技術基準（告示２９条）
２ ㎟	１０Ａ	２７Ａ
5.5 ㎟	２０Ａ	４９Ａ
８ ㎟	３０Ａ	６１Ａ
１４ ㎟	５０Ａ	８８Ａ
２２ ㎟	８０Ａ	１１５Ａ
３８ ㎟	１００Ａ	１６２Ａ
８０ ㎟	２００Ａ	２５７Ａ
１５０ ㎟	３００Ａ	３９５Ａ

10. 負荷について

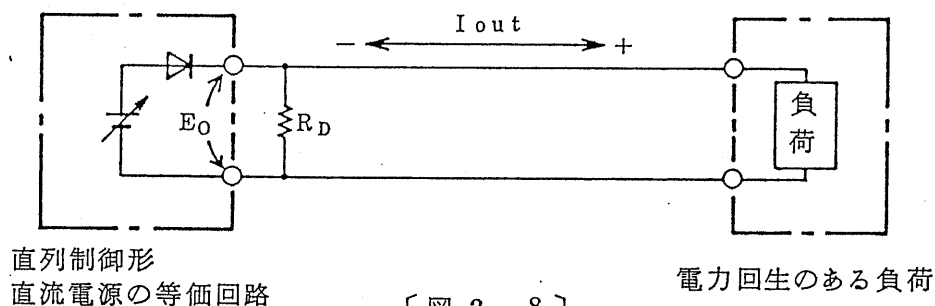
次のような負荷の場合に出力が不安定になるため注意してください。

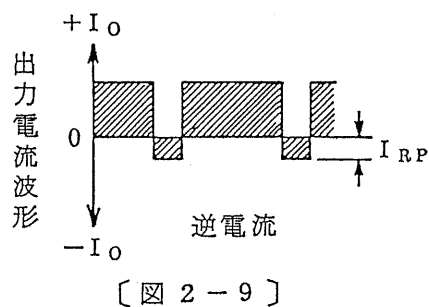
(a)負荷電流にピークがある場合やパルス状の場合

メータの指示は平均値のため指示値は最大電流以下でもピーク値が電流設定値をオーバしてしまい瞬時定電流領域に入り出力電圧が低下します。注意して見ると定電流動作表示ランプがうすく点灯しています。

〔図2−6〕負荷電流にピークがある場合　〔図2−7〕負荷電流がパルス状の場合

この場合，定電流の設定値を大きくするか電流容量の増加が必要です。

(b)電源へ電流を逆流させる負荷の場合

本機へ電力を回生するような負荷（インバータ，コンバータ，変成器等）は負荷からの逆電流を電源が吸い込めない為，出力電圧が上昇して，出力の安定化ができなくなります。

〔図2−8〕

○この場合の対策としては逆電流をバイパスさせるための抵抗 R_D を接続します。

$$R_D〔\Omega〕\leq \frac{E_O〔V〕}{I_{RP}〔A〕}$$

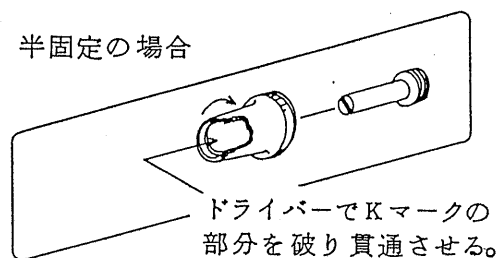
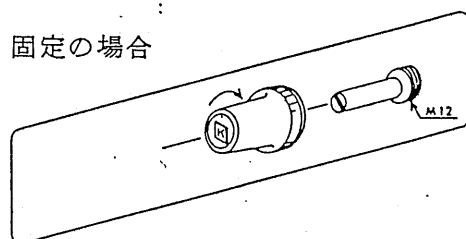
ここで　R_D ：逆電流バイパス用ダミーロード

E_O ：出力電圧

I_{RP} ：逆電流の最大値

〔図2−9〕

11. ガード・キャップについて

付属のガードキャップを使用すると電圧・電流設定ツマミを固定または半固定ツマミにすることができます。機器組込や固定電源として使用する際にご使用下さい。

〔図 2－10〕

（外部電圧コントロールの場合パネルのツマミはフルスケールの調整用抵抗器になるため必ずガードキャップを使用してください。）

2－2　パネルの説明

○　各部の説明と動作説明

① POWER 電源スイッチ
○電源を開閉するスイッチです。上に倒しますと電源表示ランプが点灯し，電源が供給されます。
注：内蔵されている保護回路（過電圧保護回路・電圧検出回路・過電流保護回路・過熱保護回路）が動作すると自動的に遮断されます。遮断すると直ちに投入はできません。原因を取り去って，5秒ほど待って，再投入してください。

② 電流計　○出力電流の指示計です。　確度フルスケールの2.5％

③ 電流計ゼロ調整　○電流計の0A指示を合わせるための調整穴です。

④ 電圧計　○出力電圧の指示計です。　確度フルスケールの2.5％

⑤ 電圧計ゼロ調整　○電圧計の0V指示を合わせるための調整穴です。

⑥ 電流設定ツマミ　○定電流動作時の電流を設定します。　1回転です。

⑦ 電圧設定ツマミ　○定電圧動作時の電圧を設定します。　10回転です。

⑧ 電源表示ランプ　○本機が通電されていることを表示します。

⑨ C．C
定電流動作表示ランプ
○本機が定電流動作中であることを表示します。

⑩ C．V
定電圧動作表示ランプ
○本機が定電圧動作中であることを表示します。

⑪ OUTPUT ON／OFF
アウトプットスイッチ
○出力スイッチです。電子的スイッチでチャタリングやノイズの発生がなく長寿命です。
(注) 本機のアウトプットスイッチは機械的に出力を ON－OFFするタイプではありません。したがってOFF状態でも出力は電気的に接続されていますのでご注意ください。

⑫ CUR／VOLT. LIMIT
カレント／ボルテージリミットスイッチ
○スイッチを押すと電圧計は定電圧の設定値を，電流計は定電流設定値を表示します。
○アウトプット・スイッチ OFF の状態でこのスイッチを利用して電圧又は電流のプリセットが可能です。

⑬ OVPプリセットスイッチ（OVP：過電圧保護装置）

○スイッチを押すと電圧計にOVP動作電圧を表示します。
運転中でも出力に影響をあたえず，また保護動作を中断することなくOVP設定電圧の確認ができます。

⑭ OVP設定器　○OVPプリセットスイッチを押しながらマイナスドライバーでOVP動作電圧を設定できます。（設定値は電圧計に表示）
OVPの設定電圧範囲は次の通りです。

⑮ クローバ・スイッチ

○過電圧保護装置の動作時に出力端子に接続されているサイリスタの点弧を選択するスイッチで，半導体等，過電圧に弱い負荷の場合はONにし，バッテリ等の場合はOFFにします。
（3－3参照）

⑯ クローバ設定ランプ

○クローバ・スイッチがONであることを表示します。

⑰ VOLTAGE CHECK ※

○パネル面より出力電圧をチェックできます。
付属のチップを使用して出力電圧に設定することができます。
0.1Aのヒューズを内蔵しています。

⑱ サービス・パネル

A.o_s ：出力電流のオフセット調整器
V.o_s ：出力電圧のオフセット調整器
VMO ：プリセットOVPの電圧計校正器
VML ：ボルテージリミットスイッチの電圧校正器
VMA ：電圧計フルスケール校正器
AMA ：電流計フルスケール校正器
AML ：カレントリミットスイッチの電流校正器

（調整，校正方法は保守の章を参照してください。）

⑲ ゴム足

⑳ ファン吹出口　○クーリングパッケージの空気吹出口です。
熱風が出ますから熱に弱いものは置かないでください。
吹出口から30㎝以上空間をとってください。

㉑ 入力端子台　○電源の入力端子台です。（M5）

㉒ 後面出力端子台　○出力を取り出せます。

㉓ 端　　子　　台　○電圧・抵抗によるリモート・コントロール端子，アウトプットON／OFFコントロール端子ワンコントロール直並列運転用端子，リモートセンシング端子があります。
（４章応用の項参照）

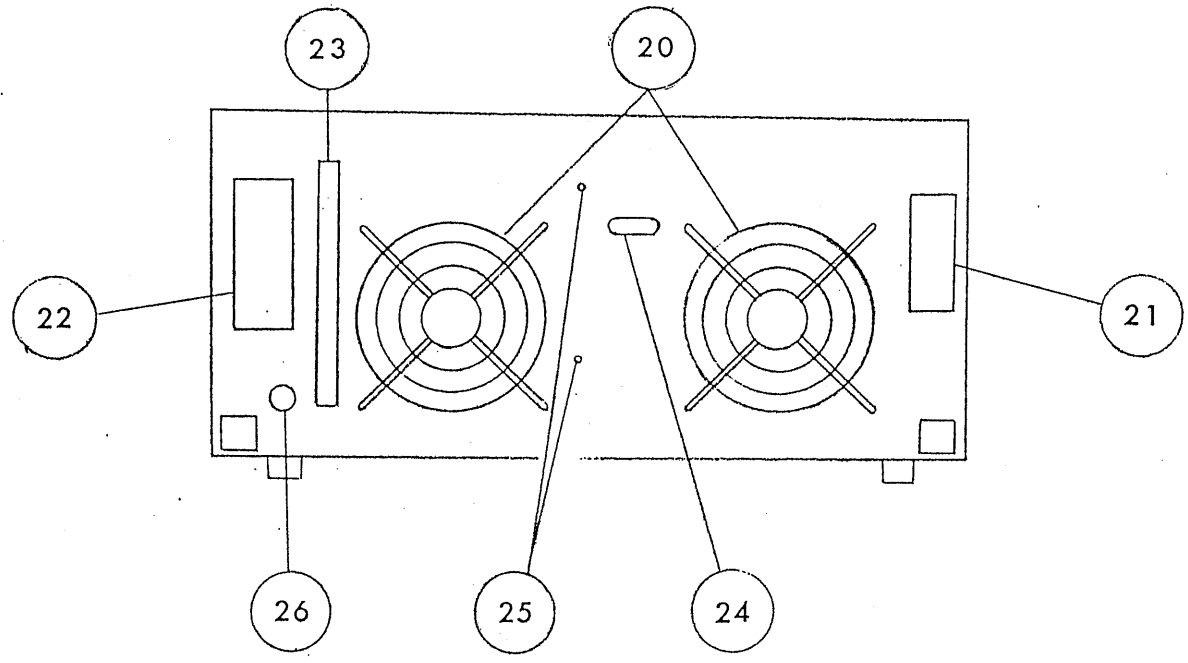
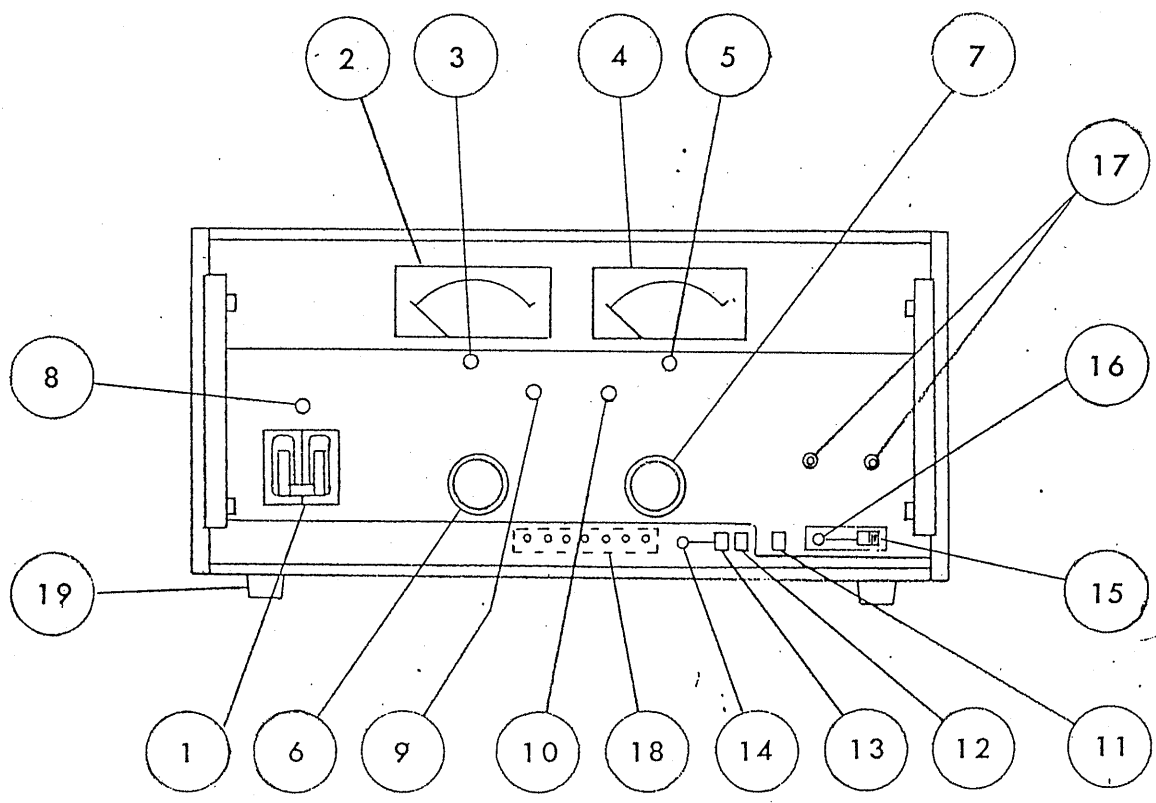
㉔ 製　造　番　号

㉕ ＤＰＯ取り付け穴

㉖ ＤＩＮターミナル　○定電圧（Ｃ．Ｖ），定電流（Ｃ．Ｃ）動作表示用接点およびＯＶＰ動作表示用接点の出力です。
（２－４参照）

844384

2
3
4
5
7
17
8
16
19
15
1
6
9
10
18
14
13
12
11

23
20
22
21
26
25
24

2－3　操作方法

(A)　定電圧電源としての使用法

1. アウトプットスイッチをOFFにします。
2. 電源スイッチを入れます。……POWERランプが点灯します。
3. カレント／ボルテージリミットスイッチを押しながら電圧設定ツマミで希望する出力電圧を設定します。
   さらにスイッチを押したまま電流設定ツマミで負荷に流れでる電流の制限値を設定します。
   (以上の操作で本機の出力電圧と電流の領域を設定したことになります。これでいかなる負荷でも設定値以上の電圧電流はかかりません。たとえば負荷の抵抗値が大きいと出力電圧は設定値のままで電流はあまり流れません。抵抗値を小さくしてゆくと出力電流は増大してゆきますが電流設定ツマミで決めた電流まで増大するとその値で止まりこんどは出力電圧が低下します。さらに負荷抵抗を小さくして短絡しても出力電流は設定値を越えることはありません。この様に定電圧動作から定電流動作へ自動的に移行して負荷を保護できます。)
4. 負荷を接続してアウトプットスイッチをONにします。
5. CVランプ（緑色）が点灯し，定電圧電源として動作します。

（注意）○負荷のインピーダンスが不明の場合や，負荷の抵抗値が電圧に対して急激に変化する場合など負荷に急激な電圧印加が好ましくない時は設定電圧をゼロにしてアウトプットスイッチを投入し徐々に電圧をあげてください。

○本機は電源の投入時，遮断時またアウトプットスイッチのON－OFFいかなる場合にもオーバーシュートはありません。

○一般にOVP（過電圧保護装置）は出力電圧の110％程度に設定します。
OVPプリセットスイッチを押して電圧計でトリップ電圧を設定します。
（詳しくは3－3参照）

○負荷までの配線が長くなると配線のインダクタンスや抵抗分で負荷端での定電圧特性が悪化します。
インダクタンス分の打ち消しには負荷端に1,000 μ～10,000 μF の高周波特性の良い電解コンデンサーを最短距離で接続します。抵抗分のキャンセルには（4－1）のリモート・センシングが有効です。

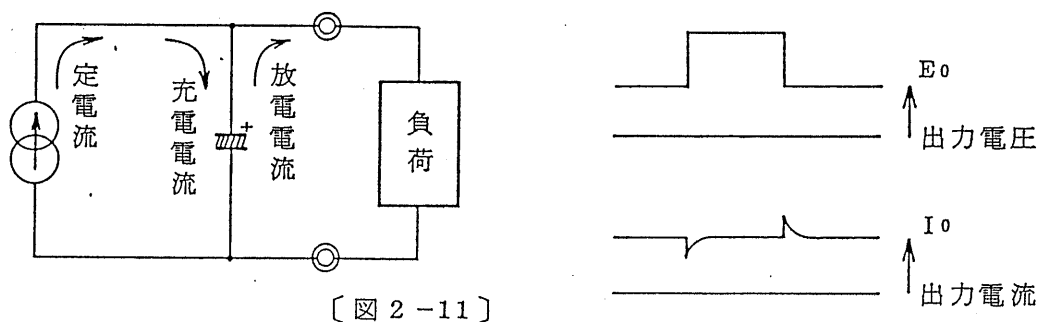
(B) 定電流電源としての使用法

1. アウトプットスイッチをOFFにします。
2. 電源スイッチを入れます。……POWERランプが点灯します。
3. カレント／ボルテージリミットスイッチを押しながら電流設定ツマミで希望する出力電流を設定します。
   さらにスイッチを押したまま電圧設定ツマミで負荷に印加できる最大電圧を設定します。
4. 負荷を接続してアウトプットスイッチをONします。
5. C. Cランプ（赤色）が点灯して定電流電源として動作します。

本機は定電圧・定電流自動移行形で，負荷抵抗が大きくなると出力電圧は $E_0 = R_L$（負荷抵抗）× I_0（出力電流）で決定されるため，増加しますが電圧設定ツマミで設定した出力電圧まで増加すると自動的に定電圧動作に移行して出力電流が減少し負荷を保護します。

（注意） ○負荷インピーダンスが自己発熱等で大きく変化する負荷の場合，定電圧領域の設定は負荷の許容電圧範囲内で余裕をとって決定してください。

○本機は出力端にコンデンサーが接続されているため，出力電圧が急峻に変化する負荷の場合，コンデンサーの充放電電流が負荷電流に重畳するため注意して下さい。

〔図 2 −11〕

○定電流値のON−OFFを行う場合は後面端子台を利用した出力 ON−OFF コントロール（4 − 2）を利用してください。
単に出力をスイッチで断続すると前述の出力コンデンサーの放電電流で設定値以上の電流が流れることがあります。

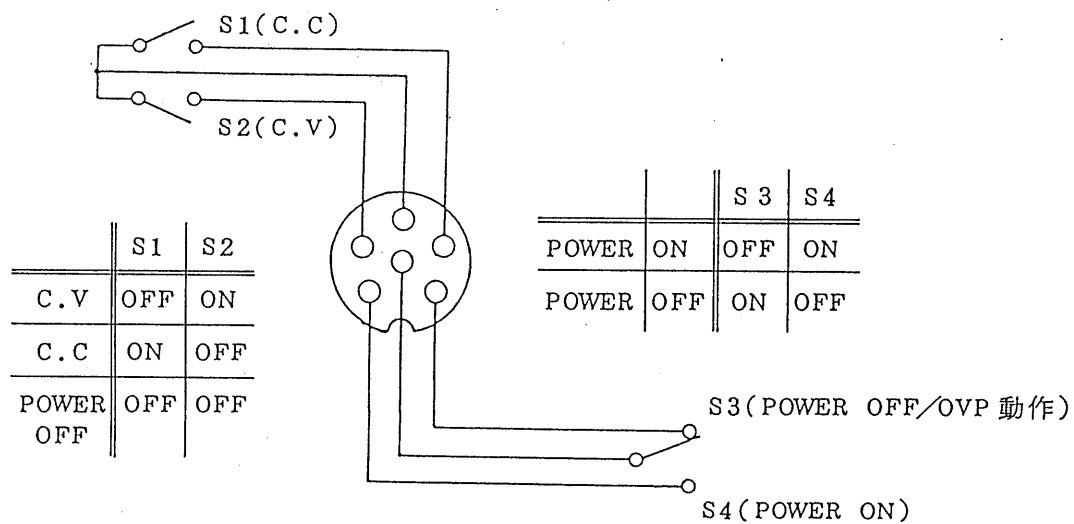
２－４　接点出力

○定電圧（C.V），定電流(C.C)動作表示用接点出力……〔図２－12〕参照

○ OVP 動作表示用接点出力……………………………………〔図２－12〕参照

PAL16−40P，16−60P，35−20P，35−30P，35−50PはOVP の動作で入力スイッチを遮断する為POWER ON−OFFの接点出力になります。

	S1	S2
C.V	OFF	ON
C.C	ON	OFF
POWER OFF	OFF	OFF

		S 3	S4
POWER	ON	OFF	ON
POWER	OFF	ON	OFF

後面DINターミナル　〔図２－12〕

3　章　保　護　回　路

3－1　概　　要

安定化電源装置はその名が示すように負荷に対して安定な電力の供給を目的とする機器でその用途はエレクトロニクスの発達と供に近年急速に拡大されてきました。
それは他の電子機器と同様に高精度・高速応答・高信頼度・高効率・高力率・小形軽量などの高性能化と低価格化の方向に進んで，多くの種類の電源装置が誕生しています。

これら安定化電源の選択に際しては要求される性能を満足するという事のほか，一般の電気信号を処理する機器とは多少異った重要な選択基準に注意を払わなければなりません。

それは安定化電源の取り扱う対象が「電力」であるためで，装置の故障や誤操作による事故はシステム全体の運転中止の他，電源装置および高価な負荷の破損につながり，最悪の場合には火災も考えられます。電源はすべての電気回路，電子回路およびそれらによって構成されるシステムの基礎になるため「故障しない」という信頼性は非常に重要になります。また万一故障が発生した場合にも未然に事故を防ぐ保護回路は重要な選択基準になります。
以下本機の保護回路について説明します。

3－2　保護回路の説明

(1)　過電圧保護装置……パネル面のクローバ・スイッチ OFF の状態

- 出力電圧が設定値を越えると電源スイッチを遮断すると同時に直列制御トランジスタを遮断し，スイッチング・レギュレータの発振を停止させます。
- 動作パルス幅は２００μSec
- リセットは電源スイッチを切り５秒程おいたのちスイッチを再投入します。
- 負荷が半導体等のように過電圧耐量が少なく，わずかな過電圧でも問題となる場合は(2)に述べる高速形過電圧保護装置を使用してください。

(2) 高速形過電圧保護装置（CROWBAR)……パネル面のクローバ・スイッチONの状態

- 出力電圧が設定電圧を200μSec 以上越えると出力端に接続されたサイリスタを短絡させて，出力に表われる過電圧を圧縮すると同時に電源スイッチを遮断，直列制御トランジスタを遮断，スイッチング・レギュレータの発振を停止させます。
- 出力端子間を短絡する為，負荷がバッテリーや大容量のコンデンサーの時には直列にダイオードを挿入する必要があります。（2－1－1参照）

(3) 電圧検出回路

- 内部の平滑用電解コンデンサーの電圧を検出して設定値以上になると，過電圧保護装置と同じ保護動作をとります。（3－2(1)参照）

(4) 過電流保護回路

- 外部コントロール時に誤操作等により定格電流のおよそ 110 ％以上の過入力の場合，過電圧保護装置と同じ保護動作をとります。（3－2(1)参照）

(5) 過熱保護回路

- ヒートシンク（半導体冷却器）の温度を検出しています。周囲温度の上昇，ファン・モータの停止によってヒートシンクがスイッチングレギュレータ部で約85℃以上，シリーズレギュレータ部で約100℃以上になると過電圧保護装置と同じ保護動作をとります。（3-2(1)参照）

(6) 温度ヒューズ

- サブ電源用トランスの巻線部に内蔵されています。巻線部の温度が約135℃以上になると溶断して入力電源を遮断します。

(7) 突入電流防止回路

- 電源投入時の突入電流を制限します。

(8) 入力ヒューズ

- 入力電流を制限します。

3－3　過電圧保護装置の使用法

○ 設 定 方 法

- ＯＶＰプリセットボタンを押すと電圧計にＯＶＰの設定電圧が表示されます。マイナスドライバーで希望のトリップ電圧を設定してください。
  （はじめて使用する場合は一度出力電圧を上昇させて，設定電圧でＯＶＰが動作することを確認したのちご使用ください。）
- 本機のＯＶＰは運転中でも出力に影響なくＯＶＰ設定電圧の確認をすることができます。また，ＯＶＰプリセットボタンを押している間も保護動作を継続していますので安心です。
- パネル面のクローバ・スイッチがＯＦＦの場合，本機の過電圧保護回路は過電圧を検出すると電源スイッチを遮断しパワートランジスタをカットオフし，同時にスイッチング・レギュレータの発振を停止する動作をとりますが，出力に出現した過電圧を積極的に引きさげる能力はありません。従って，数ボルトで１００ｍSec程度の過電圧が問題となる負荷にはクローバ・スイッチをＯＮにして，サイリスタクローバ動作をさせて下さい。（出力端に表われる過電圧を瞬時に低下させます。）
- 負荷がバッテリーや大容量のコンデンサー等の場合，クローバ・スイッチはOFFで使用して下さい。クローバ・スイッチＯＮの場合には，本機に直列にダイオードを挿入する必要があります。
  （２－１参照）

○ 設定電圧の決定

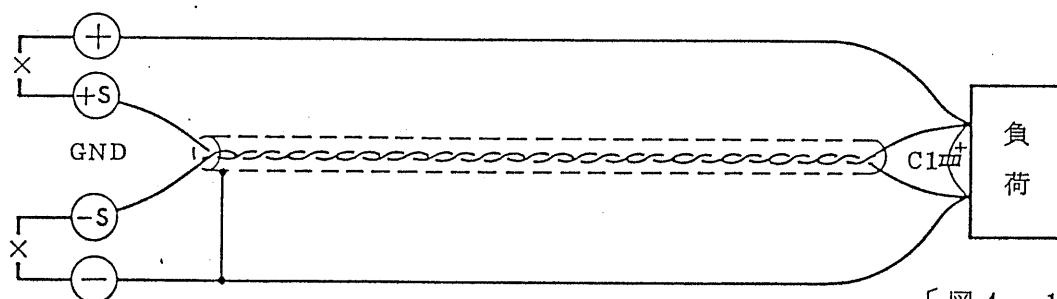
- ＯＶＰの設定電圧は負荷の許容電圧や過電圧耐量で決定すべきものですが，出力電圧にあまり接近して設定すると出力の過渡的スパイクや外来ノイズ等で誤動作する恐れがあります。
  よくＯＶＰを装備した電源で問題となるトラブルのひとつに「負荷に対しては損傷をあたえないがＯＶＰを誤動作させるに十分なノイズ」がありますので注意して下さい。
- 一般的には出力電圧の110％前後にＯＶＰトリップ電圧を設定します。

4 章 応 用

4－1 リモート・センシング

導線の抵抗による負荷端での電圧降下や接触抵抗による安定度の悪化をふせぐ方法です。

1. 電源スイッチを切ります。
2. 後面出力端子台の⊕S↔⊕，⊖S↔⊖間のジャンパーをはずします。
3. 安定化したいポイントに⊕S，⊖Sをシールド線で配線し，極性に注意して接続します。
   (誘導によるリップル電圧の悪化を防ぐため，シールド線かツイストペア線を使用してください。この時シールド線のシールドは⊖出力端子に接続してください。)
4. ⊕S，⊖Sを接続した場所（センシング・ポイント）に数百～数千μF の高周波特性の良好な電解コンデンサ（C 1）を最短距離で接続します。

〔図 4 － 1 〕

注 1. 本機は片道で約 1.2 V の電圧降下まで補償できます。
電圧降下が片道で 300 mV を越える場合は，本機の最大定格電圧が電圧降下分だけ低下します。（例，片道で 1 V の補償をすると最大定格電圧は 35－2＝33 V となります。33 V 以上では使用しないでください。）

2. 負荷までの配線が長くなると配線のインダクタンスで負荷端での出力インピーダンスが高くなり安定度が悪化します。また，インダクタンスによる位相推移が無視できなくなり発振をおこすことがありますので，必ず負荷端に電解コンデンサ（C 1）を接続してください。

3. 負荷電流が断続的に流れる負荷に対しては上記 C 1 のほか配線のインダクタンス L に〔 $L\frac{di}{dt}$ 〕なる電圧が発生し，負荷端で安定度を極端に悪化させるため⊕⊖の線材の断面積を太くし，また距離を短かくしてより合せ，インダクタンスを減少させてください。

4－2　出力のON－OFFコントロール

4－2－1　出力を正確に0Vにする方法

4－2－2　出力OFF時にボルテージ・リミットスイッチで出力電圧のプリセットができる方法

外部接点にて出力のオン・オフをリモートコントロールする方法です。

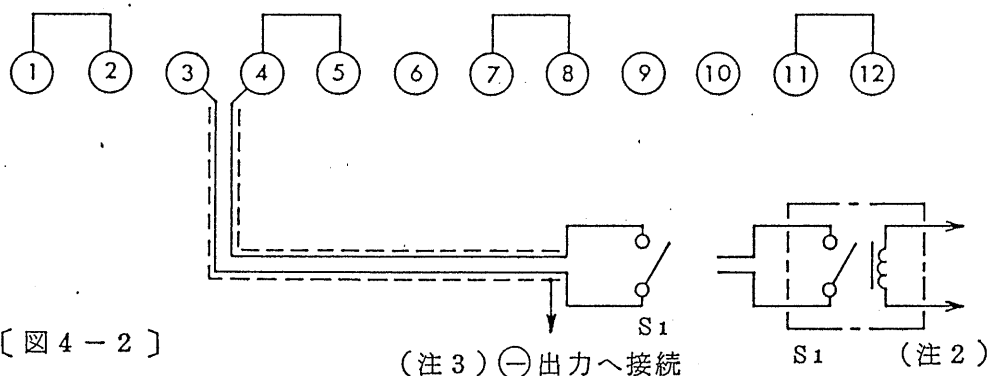
4－2－1　出力を正確に0Vにする方法

1. 電源スイッチを切ります。
2. 後面の端子台の③－④間にリモート・コントロール用接点（スイッチ：S1）を接続します。パネル面のアウトプット・スイッチをONにします。
3. 電源スイッチを投入し，リモートコントロール用接点を閉じます。
4. 出力電圧が0Vになる様サービスパネルのVosを調整します。

〔表4－1〕

接　点　(S1)	OPEN	CLOSE
出　力	ON	OFF

接点定格 DC10V 100mA

〔図4－2〕

注1.　出力オフ時パネル面のボルテージ・リミットスイッチは使用できません。

注2.　③－④端子は誤差増幅器の入力にあたる為ノイズの多い環境や距離がある場合は誤動作を防止するため，小形のDCリレーを使用してそのコイル側の配線を延長してください。

注3.　外部接点S1までの配線はシールド線を使用して，シールドは㊀出力端子に接続してください。

注4.　リモートプログラミング（校正された外部電圧・抵抗により出力を制御）を並用した時にはVosはそちらで使われて使用できないため，接点S1と直列に100Ω前後可変抵抗器を接続して接点を閉じた時出力が0Vになるように可変抵抗器を調整してください。

注5.　接点S1とパネルのアウトプットSWの関係はOFF優先となっています。

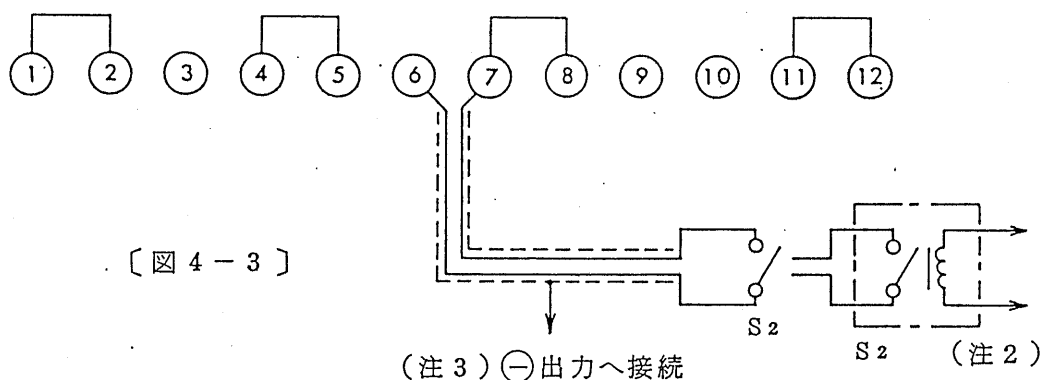
4−2−2　出力オフ時にボルテージ・リミットスイッチで出力電圧のプリセットができる方法

1. 電源スイッチを切ります。
2. 後面の端子台の⑥-⑦間にリモートコントロール接点（スイッチ：S2）を接続します。

〔表4−2〕

接　点　(S2)	OPEN	CLOSE
出　力	ON	OFF

接点定格 DC 10V
100mA

〔図4−3〕

注1. 出力オフ時パネルのカレント・リミットスイッチは使用できません。

注2. ⑥−⑦端子は誤差増幅器の入力にあたる為 ノイズの多い環境や距離がある場合は誤動作を防止するため小形のDCリレーを使用してそのコイル側の配線を延長してください。

注3. 外部接点S2までの配線はシールド線を使用してシールドは⊖出力端子に接続してください。

注4. 接点S2とパネルのアウトプットSWとの関係はOFF優先となっています。

注5. 出力OFF時出力は約−100mV程度の電圧が出ます。

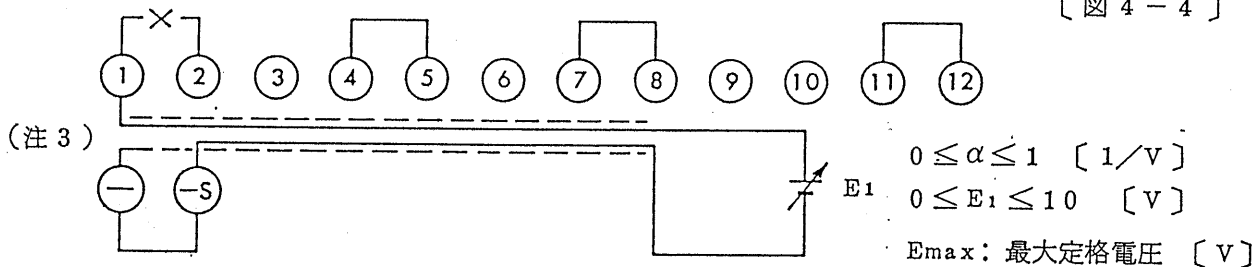
4－3　定電圧のリモートコントロール

4－3－1　外部電圧による出力電圧のコントロール

○　−S を基準にして0〜+10Vの電圧で出力電圧を変化させることができます。

1. 電源スイッチを切ります。
2. 後面端子台の①－②間のジャンパーをはずします。
3. −S －①間に①を正極性にして入力電圧（E_1）を加えます。
4. 電圧設定ツマミをはずし，ガードキャップを取り付けます（半固定）
5. 電源スイッチを入れます。（アウトプット SW−ON）
6. サービスパネルのVosでオフセット（0V）を調整し，電圧設定ツマミでフルスケールを調整します。（注4）

☆　誤配線，過電圧印加は機器を損傷する恐れがあります。電源投入前に再度ご確認ください。

〔図4－4〕

○　出力電圧（E_0）と入力電圧（E_1）の関係は　$E_0 \doteqdot \frac{1}{9} \cdot E_{max} \cdot E_1 \cdot \alpha$〔V〕となります。

○　αは電圧設定ツマミで決定される係数で0〜1の値をとります。反時計方向一杯で$\alpha=0$，時計方向一杯で$\alpha=1$の値をとります。従ってツマミを時計方向一杯にしたまま$E_1=10$Vを印加すると定格の110%の出力となるので注意してください。

注1.　出力電圧は必ず定格以内で使用してください。

注2.　−S －①間の入力抵抗は約9 kΩです。

注3.　入力電圧（E_1）のノイズは増幅されて出力に現われるため，リップルの少ないものが必要です。入力信号はシールド線（又はツイスト・ペア線）を使用しシールドは⊖出力に接続してください。長い距離を配線する場合はノイズ対策を十分にとってください。

注4.　オフセット調整：入力が0の時出力電圧が0Vになる様にする調整。
フルスケール調整：入力に対する出力電圧の比の調整で一般に最大電圧で合わせます。

4－3－2　外部電流による出力電圧のコントロール

○　－S を基準にして0～＋1mAの電流値で出力電圧を変化させることができます。

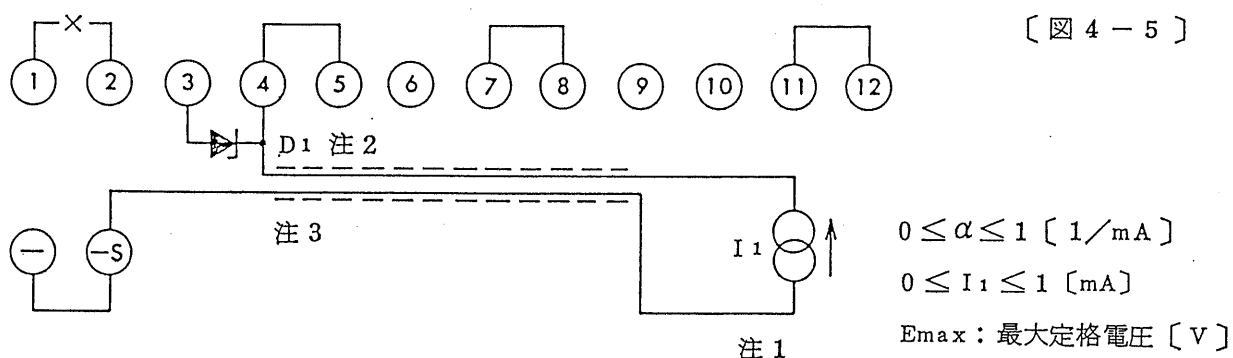
1. 電源スイッチを切ります。
2. 後面端子台の①－②間のジャンパーをはずします。
3. －S －④を正極性にして入力電流（I_1）を加えます。
4. 電圧設定ツマミをはずし，ガード・キャップを取り付けます。（半固定）
5. ③－④間に保護用ツェナーダイオード（D_1）（V_Z ＝ 12V，250mW）を接続します。
6. 電源スイッチを入れます。（アウト プット SW-ON）
7. サービス・パネルのV_{os}でオフセット（0V）を調整し，電圧設定ツマミでフルスケールを調整します。（4－3－1　注4　参照）

☆　誤配線は機器を損傷する恐れがあります。電源投入前に再度ご確認ください。

〔図4－5〕

$0 \leq \alpha \leq 1$〔1/mA〕

$0 \leq I_1 \leq 1$〔mA〕

Emax：最大定格電圧〔V〕

○　出力電圧（E_0）と入力電流（I_1）の関係は　$E_0 = E_{max} \cdot I_1 \cdot \alpha$〔V〕となります。

○　αは電圧設定ツマミで決定される係数で0～1の値をとります。
反時計方向に一杯まわした位置で$\alpha = 0$，時計方向一杯で$\alpha = 1$の値をとります。

注1.　・出力電圧は必ず定格以内で使用してください。
・入力電流源の開放電圧は1V前後にしてください。
・入力電流のリップル成分は出力リップルとなりますので注意してください。
・④端子のインピーダンスは0Ωです。

注2.　・ツェナーダイオード（D_1）は漏れ電流の少ないものを選んでください。
漏れ電流は$E_0 - I_1$の直線性を悪化させます。

注3.　・シールド線又はツイスト ペア線を使用してください。
シールドは必要ならば⊖出力へ接続してください。
・ノイズの多い環境では入力電流にノイズがとびこみ安定度が悪化したり，正常な動作をしないことがありますので注意してください。

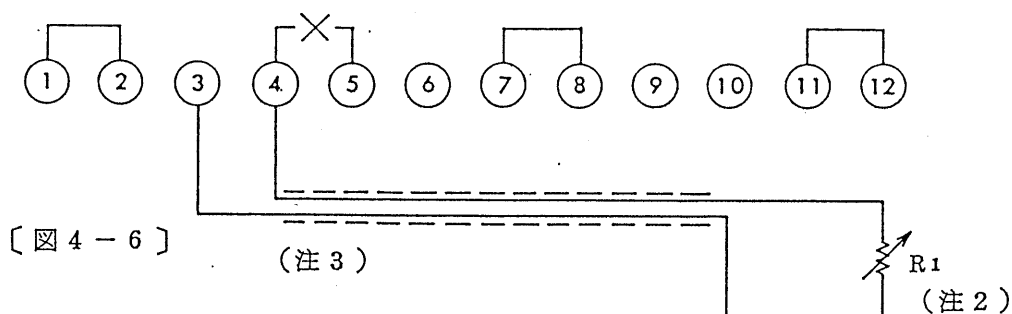
4－3－3　外部抵抗による出力電圧のリニアー・コントロール

1. 電源スイッチを切ります。
2. 後面端子台の④－⑤間のジャンパーをはずします。
3. ③－④間に抵抗器 R_1 を接続します。
4. 電圧設定ツマミをはずしガードキャップを取りつけます。（半固定）
5. 電源スイッチを入れます。（アウトプット SW―ON）
6. サービス パネルの V_{os} でオフセット（0V）を調整します。
   （4－3－1，注4 参照）

☆ 誤配線は機器を損傷する恐れがあります。電源投入前に再度ご確認ください。
（R_1 が開放になると出力は無制御になりますので注意してください）

〔図4－6〕

○ 出力電圧（E_0）と入力抵抗（R_1）の関係は

$$E_0 = \frac{1}{10} \cdot R_1 \cdot E_{max} \ [V]$$

但し　$0 \leq R_1 \leq 10$ 〔kΩ〕

Emax：最大定格電圧〔V〕

注1. R_1 はオペアンプのフィードバックループに挿入されている為，開放されると出力に過電圧が発生します。スイッチ等で出力電圧を切り換える時は切り換え時に回路がオープンにならないショートサーキットタイプを使用してください。この特性が信頼性，安全性の観点から問題となる場合は4－3－4の方法をとってください。

注2. R_1 に流れる電流は1 mA一定です。自己加熱によるドリフトを減少させる為 1／2W以上の電力定格で，温度係数，経年変化，ノイズの少ない良質の抵抗器（金属皮膜など）を使用してください。

注3. 抵抗 R_1 への配線はシールド線（又はツイストペア線）を使用し，シールドは⊖出力に接続してください。長い距離を配線する場合はノイズ等でリップルが悪化することがあるためノイズ対策，誘導対策をしっかりとってください。

注4. 配線材の抵抗値はオフセット電圧となります。注意してください。

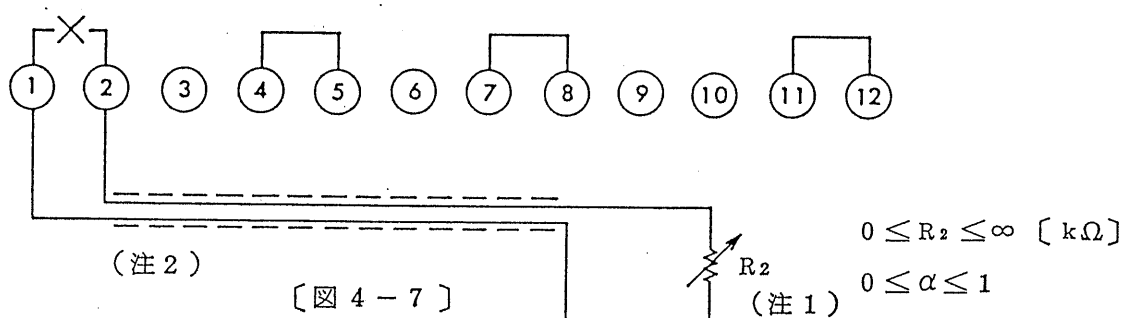
注5. 出力電圧は必ず定格以内で使用してください。

4－3－4　外部抵抗による出力電圧のフェイル セーフ・コントロール

この応用の特徴は回路（抵抗）がオープンになった場合，出力電圧が低下するフェィル・セーフ的動作をすることで，抵抗値の切り換えに一般のスイッチやリレーが使用できてオーバーシュートがありません。

短所は抵抗値と出力電圧が正比例関係にないことで特に低電圧を出力する場合，抵抗値が非常に大きくなることです。

1. 電源スイッチを切ります。
2. 後面端子台の①－②間のジャンパーをはずします。
3. ①－②間に抵抗器 R_2 を接続します。
4. 電圧設定ツマミをはずし，ガードキャップを取り付けます。（半固定）

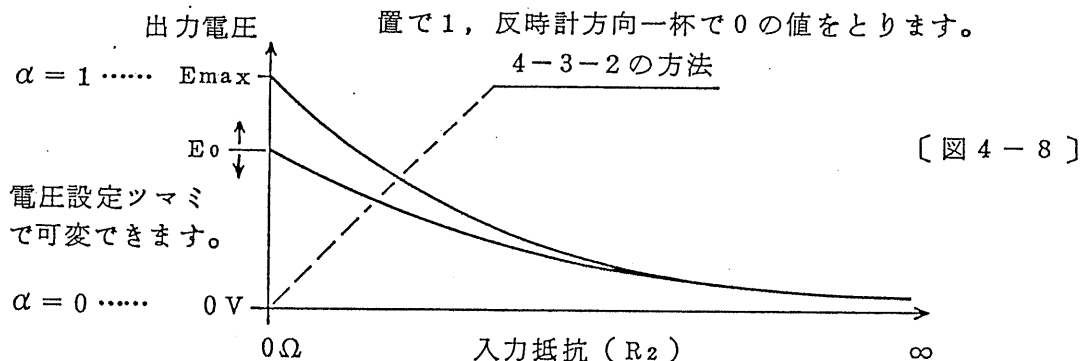
〔図４－７〕

○　出力電圧（E_0）と入力抵抗（R_2）の関係は反比例になり

$$E_0 = \frac{9}{R_2 + 9} \cdot E_{max} \cdot \alpha \ [V]$$

となります。

ここで Emax：最大定格電圧〔V〕

α　：電圧設定ツマミにより決まる係数で時計方向に一杯まわした位置で１，反時計方向一杯で０の値をとります。

〔図４－８〕

注 1.　・抵抗 R_2 に印加される電圧は最大約10V，電流は最大１mAです。

・温度係数，経年変化ノイズの少ない抵抗器を使用してください。

・R_2 の値が数100kΩ以上では誘導ノイズで出力特性が悪化することがあります。

注 2.　・抵抗 R_2 への配線はシールド線を使用してシールドを⊖出力に接続してください。長い距離を配線する場合はノイズ，誘導対策をしっかりとってくだい。

4－4　定電流のリモート・コントロール

4－4－1　外部電圧による出力電流のコントロール

○　⊖出力（※）を基準にして０～＋10Ｖの電圧で出力電流を変化させることができます。（※：正確には後面端子台⑩端子です。）

1. 電源スイッチを切ります。
2. 後面端子台の⑪－⑫間のジャンパーをはずします。
3. ⑩－⑪間に⑪を正極性にして，入力電圧（E_2）を加えます。
4. 電流設定ツマミをはずし，ガードキャップを取り付けます。（半固定）
5. 出力に電流計（シャント抵抗）を接続します。
6. 電源スイッチを入れます。（アウトプット　SW－ON）
7. サービス・パネルのA_{os}でオフセット（０Ａ）を調整し，電流設定ツマミでフルスケールを調整します。

☆　誤配線・過電圧印加は機器を損傷する恐れがあります。
電源投入前に再度ご確認ください。

〔図４－９〕

○　出力電流（I_0）と入力電圧（E_2）の関係は

$$I_0 = \frac{1}{9} \cdot I_{max} \cdot E_2 \cdot \beta \quad [A]$$

但し　$0 \leq \beta \leq 1$〔1／V〕
　　　$0 \leq E_2 \leq 10$〔V〕
　　　I_{max}：最大定格電流〔A〕

○　βは電流設定ツマミで決定される係数で０～１の値をとります。
ツマミを反時計方向一杯にまわした位置で$\beta = 0$，時計方向一杯で$\beta = 1$の値をとります。従ってツマミを時計方向に一杯まわしたまま$E_2 = 10$Vを印加すると出力電流は定格の110％となるため注意してください。

注1.　出力電流は必ず定格以内で使用してください。

注 2.　⊖S − ⑪間の入力抵抗は20ｋ〜30ｋΩです。

注 3.　入力電圧（E2）のノイズの成分は増幅されて出力に現われるためリップル・ノイズの少ないものが必要です。

注 4.　配線はシールド線（又はツイストペア線）を使用し，シールドは⊖出力に接続してください。
長い距離を配線する場合は外来の誘導ノイズに対して十分な対策をとってください。

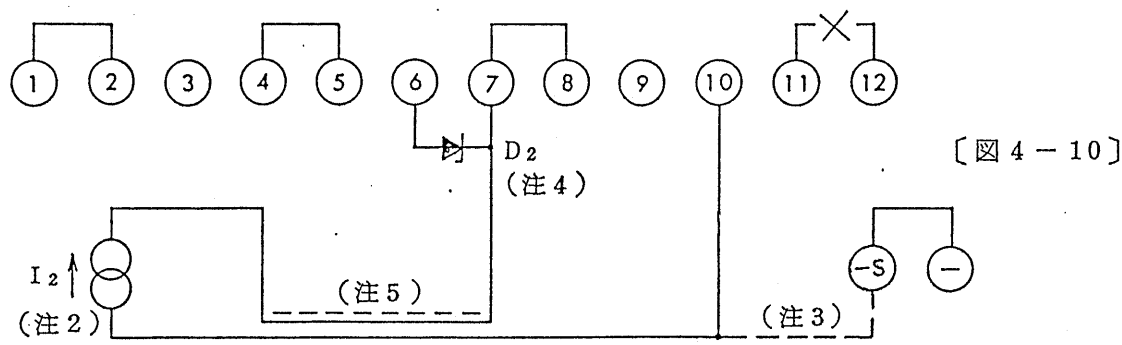
注 5.　オフセット調整：入力が０の時出力電流が０Ａになる様にする調整。
フルスケール調整：入力に対する出力電流の比の調整です。
最大電流で合わせます。

4−4−2　外部電流による出力電流のコントロール

○　⊖出力を基準にして０〜数mAの電流で出力電流を変化させることができます。
（この方式は入力信号が電流のため基準点を出力電圧コントロールの場合の⊖Sと共通にすることができ同一コモン系で出力電圧，電流の制御ができます。）

1. 電源スイッチを切ります。
2. 後面端子の⑪−⑫間のジャンパーをはずします。
3. ⑩−⑦間に⑦を正極性にして入力電流（I_2）を加えます。
4. 電流設定ツマミをはずし，ガードキャップを取り付けます。（半固定）
5. ⑥−⑦間に保護用ツェナーダイオード（D_2）（V_z＝12Ｖ，250mW）を接続します。
6. 出力に電流計（シャント抵抗）を接続します。
7. 電源スイッチを入れます。（アウトプットSW−ON）
8. サービス・パネルのAosでオフセット（0Ａ）を調整し，電流設定ツマミにてフルスケールを調整します。（4−4−1　注５参照）

☆ ⑦端子が演算増幅器の入力にあたるため誤配線，過入力で本機が損傷する恐れがあります。電源投入前に再度ご確認ください。

〔図4−10〕

○ 出力電流（I0）と入力電流（I2）の関係は

$$I0 = \frac{1}{A1} \cdot Imax \cdot I2 \cdot \beta \,[A]$$

となります。

$0 \leq \beta \leq 1$〔1/mA〕
$0 \leq I2 \leq A1$〔mA〕
Imax：最大定格電流〔A〕

ここでA1の値は〔表4－3〕

MODEL				35－50P
A1				0.33

○ βは電流設定ツマミで決定される係数で0～1の値をとります。
ツマミを反時計方向一杯にまわした位置でβ＝0，時計方向一杯でβ＝1の値をとります。

注1. • 出力電流は必ず定格以内で使用してください。

注2. • ⑦端子のインピーダンスは0Ωです。
• 入力電流のリップル成分は出力リップル電流になりますので注意してください。

注3. • 入力電流のコモン点を⑩端子から㊀S端子（出力電圧コントロール時の基準点）に変更することができます。この場合入力の電流源は約－2Vのコンプライアンス電圧（追従電圧）が必要です。（⑩端子は㊀S端子から見てリモートセンシングを使用すると約0～－2V電位が変化するためこの電圧変化で入力電流値が変化しない電流源が必要です。）

注4. • ツェナーダイオード（D2）はリーク電流の少ないものを選んでください。リーク電流は出力電流（I0）と入力電流（I2）の直線性を悪化させます。

注5. • シールド線（又はツイストペア線）を使用して，必要ならばシールドは⊖出力に接続してください。
• ノイズの多い環境では入力電流にスパイク等がとびこみ安定度が悪化したり，正常に動作しないことがあります。

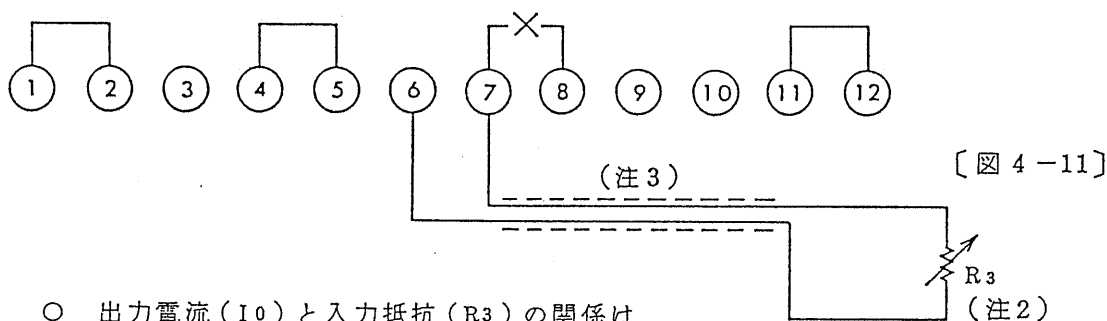
4－4－3　外部抵抗による出力電流のリニアー・コントロール

○　入力（抵抗）と出力（電流）の関係が正比例するためリモート・プログラミングに最適です。

1. 電源スイッチを切ります。
2. 後面端子台の⑦－⑧間のジャンパーをはずします。
3. ⑥－⑦間に抵抗器 R3 を接続します。
4. 電流設定ツマミをはずし，ガードキャップを取り付けます。（半固定）
5. 出力に電流計（シャント抵抗）を接続します。
6. 電源スイッチを入れます。（アウトプット SW－ON）
7. サービス・パネルの Aos でオフセット（0A）を調整します。

（4－4－1　注5 参照）

☆　誤配線は機器を損傷する恐れがあります。特に R3 が開放になると出力は無制御となるため電源投入前に再度ご確認ください。

〔図4－11〕

○　出力電流（I0）と入力抵抗（R3）の関係は

I0 ＝ Imax・R3〔A〕

但し　0 ≦ R3 ≦ 1〔kΩ〕

Imax：最大定格電流〔A〕

注1.　o R3 は演算増幅器（OP・アンプ）のフィードバック・ループに挿入されている為，R3 の配線が開放されると過電流が発生します。したがってスイッチ等で抵抗器を切り換えて出力電流を変化させる場合は切り換え時に回路がオープンにならないショートサーキットタイプのスイッチを使用してください。この特性が問題の場合は 4－4－4 の方法をとってください。

注2.　o R3 に加わる電圧・電流は最大 10V，0.5mA です。温度係数，経年変化，ノイズの少ない 1/4W 以上の抵抗器（金属皮膜など）を使用してください。

注3.　o R3 への配線はシールド線（又はツイストペア線）でシールドは⊖出力に接続してください。

o 配線材の抵抗値はオフセット電流になるため注意してください。

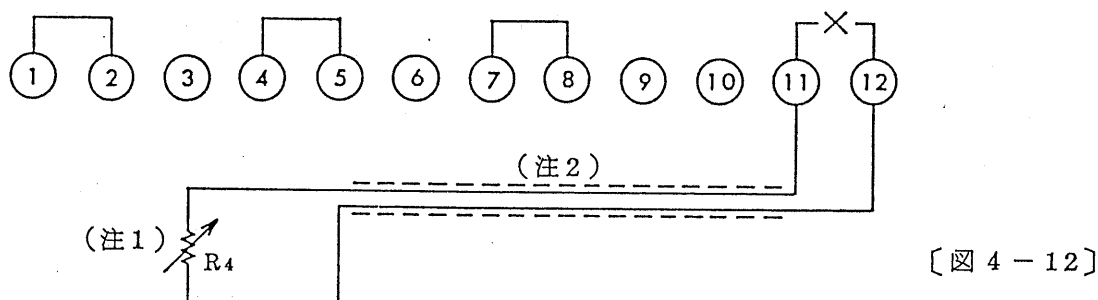
o 長い距離を配線する場合はノイズや誘導によりリップルが悪化することがあります。特にノイズの多い環境の場合注意してください。

注4.　o 出力電流は必ず定格以内でご使用ください。

4−4−4　外部抵抗による出力電流のフェイル・セーフ形コントロール

○　この応用の特徴は回路(抵抗)がオープンになった場合，出力電流が減少しフェイル・セーフ的動作をすることで，抵抗値の切り換えに一般のスイッチやリレーが使用でき，オーバーシュートがありません。
短所は抵抗値と出力電流が正比例関係にないことで特に小電流を出力する場合抵抗値が非常に大きくなることです。

1. 電源スイッチを切ります。
2. 後面端子の⑪−⑫間のジャンパーをはずします。
3. ⑪−⑫間に抵抗器R4を接続します。
4. 電流設定ツマミをはずしガードキャップを取り付けます。(半固定)

〔図4−12〕

○　出力電流(I_0)と入力抵抗(R_4)の関係は反比例になります。

$$I_0 = \frac{A2}{R_4 + A2} \cdot I_{max} \cdot \beta \ [A]$$

$0 \leq \beta \leq 1$

$0 \leq R_4 \leq \infty$ 〔kΩ〕

Imax：最大定格電流〔A〕

○　βは電流設定ツマミで決定される係数，0〜1の値をとります。
ツマミを反時計方向に一杯まわした位置で$\beta = 0$，時計方向一杯で$\beta = 1$の値をとります。

○　A2の値は機種により次の様になります。

MODEL				35−50P
A2〔kΩ〕				26.5

〔表4−4〕

〔図4−13〕

出力電流Io

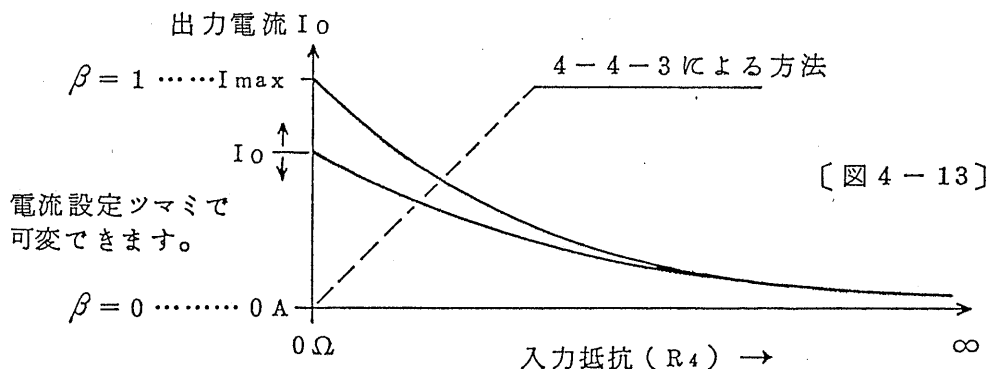
$\beta = 1$ ……Imax

Io

電流設定ツマミで可変できます。

$\beta = 0$ ……… 0A

4−4−3による方法

0Ω　入力抵抗(R4)→　∞

注 1.　• 抵抗 R_4 に印加される電圧は最大１０Ｖ，電流は１mAです。

• 温度係数，経年変化，ノイズの少ない抵抗器を使用してください。

• R_4 の値が数１００kΩ 以上では誘導ノイズで出力特性が悪化することがあります。

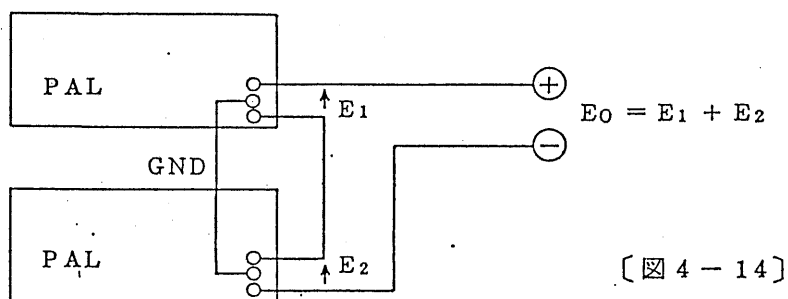
注 2.　• R_4 への配線はシールド線を使用してシールドを⊖出力に接続してください。

• 長い距離を配線する場合はノイズ・誘導対策をしっかりとってください。

4 － 5　直列・並列接続

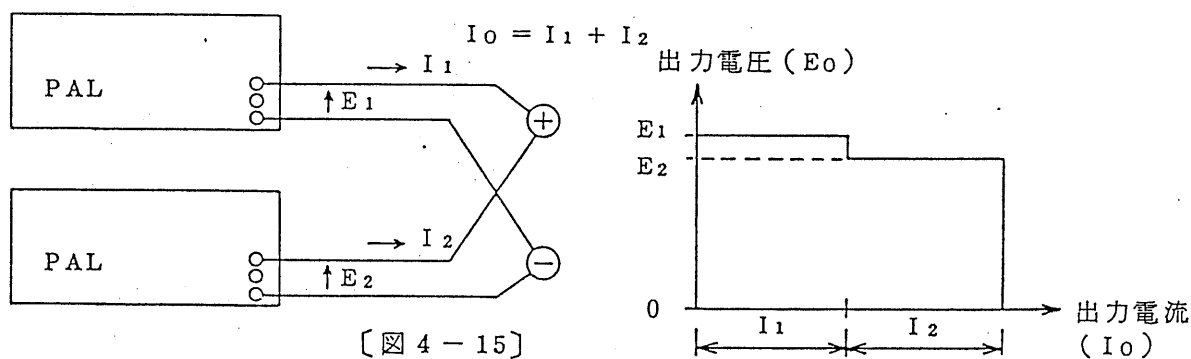
4 － 5 － 1　直 列 接 続

○　本機の出力を直列に接続して出力電圧の増大ができます。

〔図 4 － 14〕

1. 直列に接続できる台数は対接地電圧（250 V）で制限されます。
   （例　35 V の場合　250 ÷ 35 ＝ 7 …5　7 台まで）
2. 各電源のシャッシ間電位をなくす為，各機の GND を共通にて希望の電位に接続します。
3. 直列に接続された電源は必ずパワースイッチを入れた状態で使用してください。

4 － 5 － 2　並 列 接 続

○　本機の出力を並列に接続して出力電流の増加ができます。

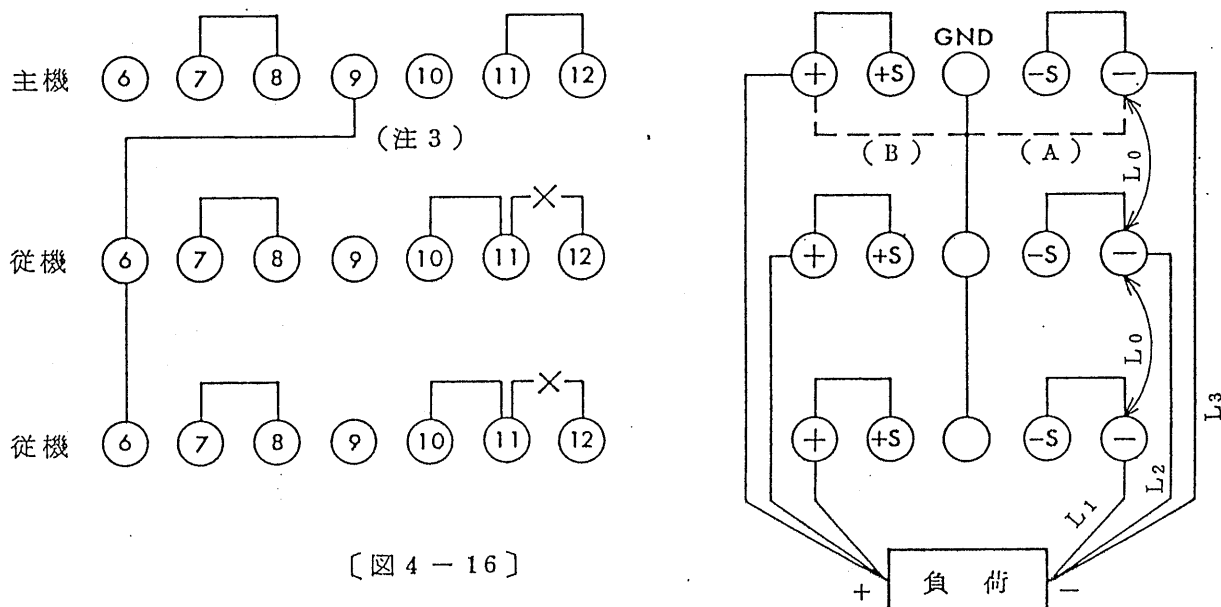
〔図 4 － 15〕

1. 定格電圧以上の電圧を出力に加えないでください。
2. 定電圧で使用する場合は各機の出力電圧を一致させてください。動作は始め出力電圧が高い電源から電流を供給し，定電流に入り出力電圧が低下すると次の電源が電流を供給するという具合に常に1台が定電圧で動作します。各出力電圧の差は負荷にとって変動になります。
   （定電流で使用する場合はすべて定電流ランプが点灯しています。）

4－6　ワンコントロール並列運転

○　主機（1台）のみの操作で並列に接続された従機（台数無制限）をコントロールして電流容量の増加ができます。

（注意）本応用は同一機種（モデル名）のみ有効です。

1. 電源スイッチを切ります。
2. 従機の後面端子台⑪－⑫間のジャンパーをはずし⑩－⑪間にジャンパーを入れてショートします。
3. 主機の後面端子台の⑨と従機の⑥を接続します。
4. 負荷への配線の長さが2m以上になる場合，各機の出力端子間を2m以内で可能な限り短かく接続します。
5. 各機の出力端子から負荷へそれぞれ同じ長さ・太さの線で配線します。（PALシリーズの場合⊖出力の配線の長さ・太さ…正確には⊖出力端子と⊖側負荷端間の電位差…が異なると各機の電流分担が違ってくるため注意してください。）

〔図4－16〕

6. 従機の電圧設定ツマミを時計方向に一杯まわしてください。
7. リモート・センシングを行う場合 リモートコントロールを行う場合はいずれも主機を操作してください。

$L_1 = L_2 = L_3$

$L_1 > 2$mの場合　$L_0 \leq 2$m

（A）：マイナス接地

（B）：プラス接地

注1.　• 出力の動作は主機のCV／CCランプが表示します。

　　　• 従機はCCランプが常時点灯します。

注2.　• 負荷への配線材は 7頁の表2－1を参照にしてください。

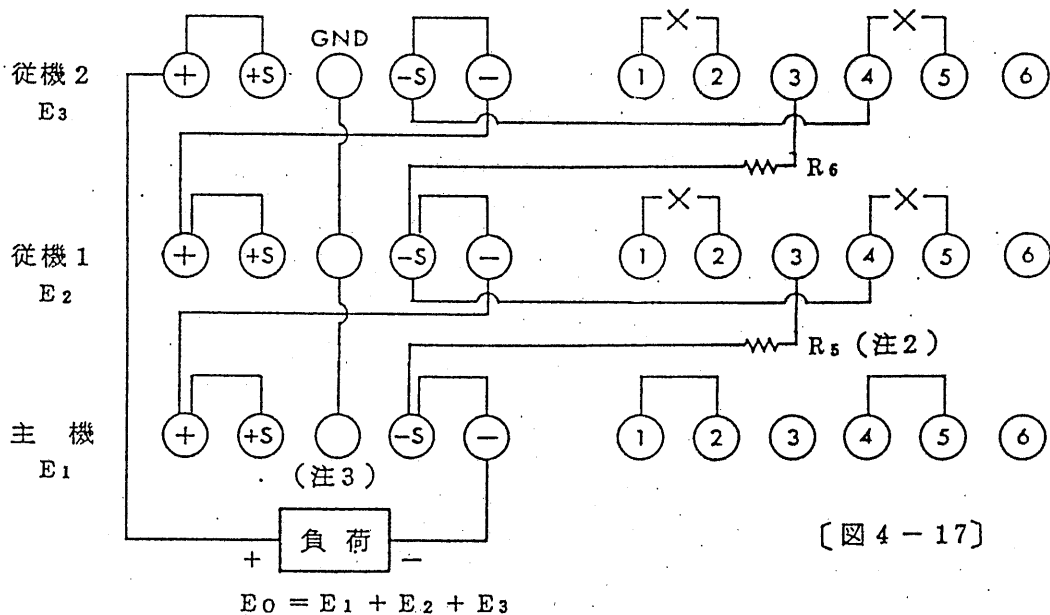
注3.　• 特に必要のない限りGNDは⊕又は⊖に接続してご使用ください。

注4.　• OVPを設定する場合は主機従機のすべてに設定する必要があります。

4 －7　ワンコントロール直列運転

○ 主機（1台）のみの操作で直列に接続された従機をコントロールして出力電圧の増大ができます。

1. 電源スイッチを切ります。
2. 直列接続される電源のうち一番下に接続される機が主機でその上に接続される機はすべて従機となります。
   従機の後面端子台の①−②間，④−⑤ 間のジャンパーをはずし④ を⊖S に接続します。
3. 従機の③と下に接続された機の⊖S 間に抵抗 R5（R6）を接続します。
4. 各機の出力端子を直列に接続します。
5. 各機のGND を共通にして希望の電位に接続します。
6. 従機の電流設定ツマミを時計方向に一杯まわします。

〔図 4 − 17〕

$E_0 = E_1 + E_2 + E_3$

○ 外部抵抗 R5（R6）の決定方法

E1 ：主機出力電圧　〔V〕
E2 ：従機 1 の出力電圧〔V〕
E3 ：従機 2 の出力電圧〔V〕

$$R5 = \left(\frac{E1}{E2} \times A\right) - B \ [k\Omega]$$

但し $R5 [k\Omega] \geq 0$ ，$\left(E2 \leq \frac{A}{B} \cdot E1\right)$

○ R5〔kΩ〕は温度係数，経年変化，ノイズの少ない 1／2 W以上の抵抗器

ここでA，B の値は

〔表 4 − 5〕

MODEL				35−50P
A〔kΩ〕				18
B〔kΩ〕				5

○　R6の決定はR5の式で　E1 → E2

E2 → E3

R5 → R6　と置き換えてください。

注 1.　• 直列接続できる台数は対接地電圧（250V）で制限されます。
（例，35Vの場合　250÷35＝7…5　7台まで）

注 2.　• R5（R6）は③端子のそばに配置してください。
③－⊖Sは基準電圧入力となるため誘導による出力リップルを防ぐため必要ならばシールド線を使ってください。

注 3.　• 各電源のシャッシ間電位をなくすため，必ず各機の GND は共通にして希望の電位に接続してください。

注 4.　• 直列に接続された電源は必ずパワースイッチを入れた状態で使用してください。

注 5.　• リモート・センシングを行う場合は最上部の電源の ⊕S と主機の ⊖S を使用してください。
• リモートコントロールを行う場合は主機を操作してください。

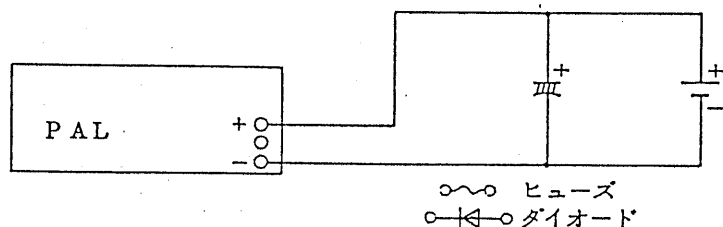
注 6.　• OVP を設定する場合は主機，従機のすべてに設定する必要があります。

8 4 4 0 8

4－8　定電流充電・放電

4－8－1　定電流充電

○　バッテリーや電解コンデンサーの定電流充電ができます。

〔図４－18〕

1. パネル面のクローバ・スイッチをOFFにします。
2. カレント／ボルテージリミットスイッチを挿して，電流設定ツマミで充電電流，電圧設定ツマミで充電終了電圧を設定します。
3. 電源とバッテリーの同一極性どうしを接続します。
   極性を誤ると本機出力端子間に内蔵されている逆接続保護ダイオードを焼損することがあります。（このダイオードで電源本体は保護されますが負荷を短絡することになり危険のため極性には十分注意してください。ヒューズやダイオードを直列に挿入すると誤って逆極性に接続した場合の保護になります。）
4. アウトプットスイッチを入れると定電流で充電し，充電終了電圧で自動的に定電圧モードに移り充電を終ります。

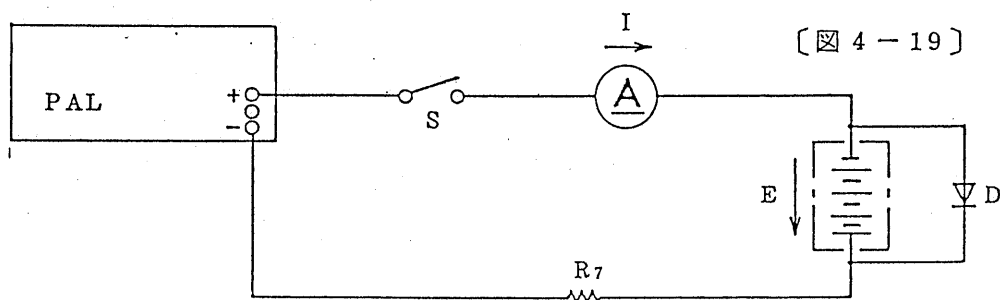
注1.　本機はポテンショ・メータ焼損防止回路を採用しているため電圧設定ツマミをバッテリーや電解コンデンサー電圧以下にしても問題ありません。

注2.　電源をバッテリー等に接続する瞬間「パチッ」と火花が出ることがあります。これは電源の出力コンデンサーをバッテリーが充電するためで問題はありません。
電源の出力電圧をバッテリー電圧と同じにして接続すればなくなります。

注3.　電源をバッテリーやコンデンサーに接続したままスイッチを切ると電源に内蔵されている放電回路で数100mA放電します。
この電流が問題になる場合はスイッチを入れるかダイオードを直列に接続してください。

注4.　クローバ・スイッチは，OFFで使用して下さい。クローバ・スイッチONで使用の場合は，本機に直列にダイオードが必要となります。
（２－１，３－３参照）

4－8－2　定電流放電

○　電源を使った定電流放電の方法です。

E　：放電開始時のバッテリー端子電圧〔V〕

I　：放電電流（定電流値）〔A〕

R7：放電用負荷抵抗〔Ω〕

D　：逆充電防止ダイオード

$$R_7\,[\Omega] = \frac{E\,[V]}{I\,[A]}$$

抵抗R7での消費電力は　　$P = I^2 \cdot R\,[W]$

1. 電圧設定ツマミで出力電圧を放電するバッテリー端子電圧より数V高く設定します。（これによりバッテリーを0Vになるまで定電流放電することができます。）
2. 放電用負荷抵抗値Rを決定します。消費電力に十分余裕のあるものを選定してください。
3. カレント／ボルテージ・リミットスイッチを挿入して，電流設定ツマミで放電電流を設定します。
4. アウトプットスイッチをONにしてスイッチSを閉じると定電流放電を開始します。
5. 放電を中止する場合はスイッチSを開いてください。
   本機の電源スイッチやアウトプット・スイッチをOFFしても電源の出力に並列に入っているダイオードを通して流れつづけます。

注1.　放電する場合は必ず負荷抵抗Rを接続してください。
　　（直接バッテリーを接続すると本機を損傷します。）

注2.　逆充電防止ダイオードは忘れずに接続してください。

5 章　保　守

5－1　点　検

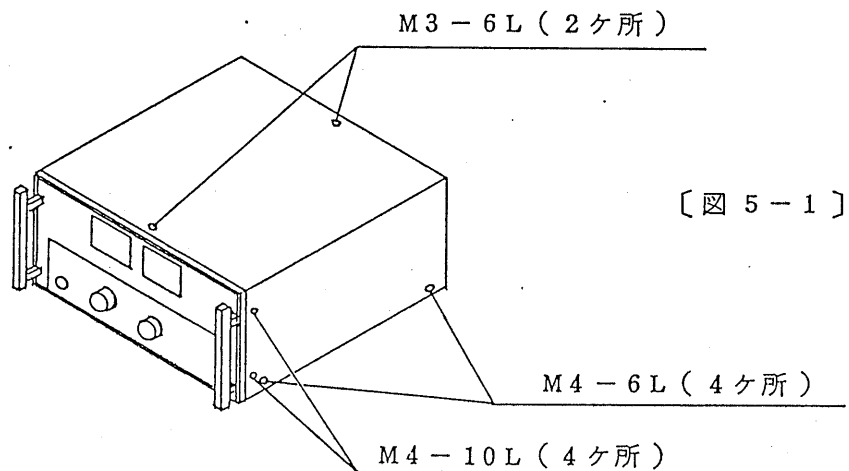
○ いつまでも初期の性能を保つよう一定期間毎に点検を行ってください。

5－1－1　ほこり・よごれの掃除

- パネル面がよごれた場合は布にうすめた中性洗剤かアルコールをつけて軽くふきとり，からぶきしてください。
- ベンジンやシンナーは避けてください。

5－1－2　内部の掃除

- カバーのはずし方

〔図 5－1〕

- 安全の為，作業の前に電源コードをぬいてください。
- ケース風穴のほこりや内部にたまったほこりはコンプレッサーや電気掃除機の排気を利用してはらってください。

（注意）

- 内部のシールドケースはあけないでください。
  （シールドケース内部はユーザによるメンテナンスの範囲外です。）
- 内部のスイッチには手をふれないでください。

5－1－3　電源コードの点検

- ビニール被ふくの破損の有無，プラグ部分の過熱，端子台のネジのゆるみ，圧着端子部分のゆるみ等をチェックしてください。

5－2　調整・メータ校正

5－2－1　電圧計の校正

出力に確度 0.5 ％以上の電圧計を接続し出力電圧を〔表5－1〕の値にしてサービス・パネルのVMAで電圧計を校正します。

5－2－2　ボルテージ・リミットスイッチの校正

出力電圧を〔表5－1〕にします。カレント／ボルテージ・リミットスイッチを押した場合，電圧計の指示が同じになるようにサービス・パネルの VML で校正します。

5－2－3　プリセットOVPの校正

出力電圧を〔表5－1〕の値にした後，OVP 設定電圧をゆっくり下げていき（マイナスドライバーで OVP の設定器を反時計方向にゆっくりまわします。）OVP が動作した所で止めます。〔表5－1〕の値に OVP を設定したことを確認します。

OVP プリセットボタンを押した時に電圧計の指示が OVP 設定電圧を指示するようにサービス・パネルのVMOを校正します。

5－2－4　定電圧最大可変範囲の調整

出力に確度 0.5 ％以上の電圧計を接続します。電圧設定ツマミを時計方向に一杯まわした時出力電圧が〔表5－1〕の値になるように PCB A－480 の R257 を調整します。　（図5－2参照）

5－2－5　電流計の校正

出力に確度 0.5 ％以上の電流計を接続し，出力電流を〔表5－1〕の値にしてサービス・パネルのAMAで電流計を校正します。

5－2－6　カレント・リミットスイッチの校正

出力電流を〔表5－1〕の値にします。カレント／ボルテージ・リミットスイッチを押した場合，電流計の指示が同じになるようにサービス・パネルのAMLで校正します。

5－2－7　定電流最大可変範囲の調整

出力に確度 0.5 ％以上の電流計を接続します。電流設定ツマミを時計方向に一杯まわした時，出力電流が〔表5－1〕の値になるようにPCB A−480のR211を調整します。　（図5－2参照）

5－2－8　直列制御トランジスタのV_{CE}調整

1. 入力電圧を定格（AC 200V）に合わせます。
2. 負荷を接続し全負荷状態とします。
3. パワートランジスタのコレクターエミック間に平均値指示形の直流電圧計を接続して，電圧計の読みが〔表5－1〕の値になるようにPCB A−480のR264を調整します。

〔表 5－1〕

MODEL				PAL 35−50P
電圧計の校正				35V
ボルテージ・リミットスイッチの校正				35V
プリセットOVPの校正				35V
定電圧最大可変範囲の調整（R257）				36V
電流計の校正				50A
カレント・リミットスイッチの校正				50A
定電流最大可変範囲の調整（R211）				52A
直列制御トランジスタのV_{CE}調整（R264）				3.5V

○　修理について

万一故障の場合はご連絡ください。修理は原則として当社又は認定サービス代理店で行います。本シリーズのシールドケース内はユーザーによるメンテナンス範囲外です。（内部を調整したり改造した機器は修理依頼をお引き受けかねる場合もありますのでご注意ください。）

直列制御トランジスタVCEの調整（R264）
定電圧最大可変範囲の調整（R257）
定電流最大可変範囲の調整（R211）

〔図5－2〕

ブロック・ダイアグラム

844415